

名士の言論

●女子の目的(井上哲次郎氏)

總て人間の行に道徳上の價値を附すると云ふことは、目的より打算して來るものであります、それで爰に女子の目的と云ふことを一つ考へて見る必要があり、さて女子といふものは如何なる事を目的とすべきでありますか、廣く言へば男子と同じく人格を修養するといふ事が目的であります、即ち完全なる人格の理想を實現すると云ふ所に方針がなくはならぬ、併ながら其の人格を修養すると云ふことも唯漠然人格を修養すると云ふことではなかく實際出來ない事で何等かの手段方法を経て初めて此目的が達し得らるゝものであります、即ち或る特殊の地位を得て或る特殊の本務を遂がて、そうして此の人格の發展が期し得らるゝ次第であります。そこに至ると男女兩性は餘ほど異つた經路を辿る事になるのであります、男子は多く社會の各方面に活動し事業を成し遂げて、そうして其間に人格の發展と云ふことが期し得らるゝのであります、女子はどうしても男子のやうに廣く社會に出ると云ふ事がむづかしいので、多くの場合に於ては人の妻となつて能く夫を輔け一家を治めて行くと云ふやうな事、又年供を能く育て、母たるの本務を全うすると云ふやうな事であり、人格の發展は斯る手段方法を経て期し得らるゝ次第であります、此點から云ふと所謂賢妻良母と云ふことが先づ、多數女子の目的とせんければならぬ所であり、賢妻良母は即ち女子の人格を全うす

る所以であります。所が近來いへば、女子の問題に就て説を立つる者がありまして、動もすれば賢妻良母など、云ふことを駁撃する者があります、併ながら能く其言ふ所を聽て考へて見ますに、さう云ふ論はちよつと奇矯であつて面白けれど、決して穩健なる教育上の考ではないのであります、それは分り切つたことで男女兩性が相俟つて人間社會と云ふものが成立つものであります、かうして、女子の多數に取つては結婚と云ふ此の人生の一大事件を成し遂げなければならぬ、さうせんければ人間は全きこと能ずであります、男子と女子と云ふものは離れ々になればどうも不完全なものであります、兩性相俟つて初めて相互に其の缺陷を補ふことが出来るのであります、それと云ふは男女兩性と云ふものは唯生理上の相違があるばかりでなくして、此の生理上の相違からして、精神上の相違が起つて來て居るのであります、單に此點から考へても素より女子は結婚と云ふ此の社會の一大事件を度外視してはならぬ次第であります。(日本婦人第八年第二)

子供は私寶にあらず(中島徳藏)

何れの家庭に就て見ても、多くは自分の子供を愛するの極其手供を寶のやうに取扱ひ、子供の望む所、子供の言ふ所に委せて、所謂之を愛で、居る、之れは親子の情としては、さもあるべき次第であるが、其愛するると云ふ事が、多くは唯親などの感情的に出るのが多い、只自分で愛いから之を愛すると云ふ位に止まり、只自分の感情を満足せしむるに過ぎないのである、即子供は目的にあらずして、手段となつたのである、故に其子供は只親の感情を満足せしむる爲の道具となつて、人間生存の最大必要なる社會的共存の眞意を忘却したのである、故に此の如くにして育てら

れたる兒童は、社會に立つて困難に遭遇するに至つては、怒ち意氣銷沈、遂に落志弱行者と成つて、自殺を企つるが如きに至るのである、之は全く意志訓練と社會教育の必要を忘れたからである。

親又は祖父祖母が子供や孫を愛するのは決して惡むことではなない、人情として必ずなければならぬ、否な必ず親は子を愛せなくてはならぬ、併し親が子供を愛するには、如上のよゝに自分の爲めに愛してはならぬ、子供は社會的のものである公有的の者である、國家的の者であると云ふことを忘れてはならぬ、惟自分の子供であるから、自分の私有物であると云ふ様な考を以て、而も自分の愛情を満足させる爲に、之を愛してはならぬ、何となれば此の如き愛を以て育て上げたる兒童は、親の下を離れて一たび活きたる社會に出づれば怒ち浮世の荒波に沈死するに至るのである、彼の落志弱行者の人を出し浮氣の人物を出すは家庭教育の仕方に在りと云は、此理由による。

女子の修學と子女教育(大町桂月)

女が學問をし技藝を學び、人格の修養をするのは、詮する處、家庭教育者の主任者としての資格を供へようとするに外ならぬものであります。

學問にしても幾ら知識があつても、智恵が無く譯が分らなかつたり、常識が缺けて居つたりしては、少しも子女を教養する事が出来ませんで、學問をした甲斐が無い譯であります。

人が子を愛するのは、自然の人情であつて、男親よりは母親の方が特別に深いものであります、従つて女と云ふものは、先天的に子の教育に興味を持つて居るものであります、馬鹿では自分に教育が出来ません。それから普通は、愛に溺れて却つて子女を

悪にする母親が多い、それ故に女は充分に自分を見分けて、實踐躬行以て子女を教育すると云ふ事に、深い興味を持つて居つてそれで、初めて人の妻たる天職を果し得るのであります。

見え豪い人の母親は、屹度豪い人であり、幾ら父親が豪くも母親が馬鹿であつたならば、豪い人は決して出来ないものであります、良い子を世の中に出すと云ふ事は、女の第一の天職であつて、女たるものはそこを深く興味を持つて居れば、一身の幸福のみならず、一家の幸福でもあり社會の幸福でもあります。

女子が智恵を磨いたり、家事の經濟が甘かつたり、學問が出来たり、技藝に長じたりする事は、詮する處、子女の教育に役立つべき爲のものに外ならぬのであります、そこで女は學問をするにしても、技藝を學ぶにしても、一身のたゞ虚榮心を満足せしめやうとのみ思はないで、一身の修業は子女の教育の爲めであつて、のみならず非常に社會に及ぼす影響が大なるものであると云ふ事を自覺せねばならぬのであります。

